

ヤングケアラーとしての経験とその影響に関する研究  
－ 児童期・青年期前期の事例を通して－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
渡辺 舞

一般的に「介護」や「ケア」という言葉を聞くと、高齢者介護や障害者介護、ターミナルケア、育児等、様々な介護が連想されるが、いずれもその担い手は「大人」のイメージではないだろうか。「介護」の中でも、様々な家庭の事情から、親や兄弟、祖父母を介護する若者、いわゆるヤングケアラーの存在については関係者等、一部の層の関心を集めるに留まっている。

イギリスでは、早くから、ヤングケアラーの実態調査が行われており、このような子どもへの影響として、教育や社会生活面での困難、さらに親子関係の逆転等が指摘されてきた。わが国においても、2013年度の総務省の調査によると、介護を担う若者(15歳から29歳)の数は推定17万人にも及ぶと言われる。一方で、日本においては、その実態を明らかにしようとする研究はまだ少ない。

そこで、本研究では、子どもでありながらケアを担った人の「生きられた経験」の語り、時間経過に伴う環境の変化を考慮し、質的に分析することで、ケアを担うに至った経緯や、ケアを担うことによる社会生活上の影響をライフステージの変化の中で捉え、明らかにすることを目的とした。

対象者は児童期・青年期前期にケアを担った経験のある当事者1名とし、半構造化面接を行った。子どもがケアを担うようになるまでの経緯と、それからの歩みを可視化することを目的とし、研究1では複線経路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model:以下TEM)を用いた。さらに研究2では、TEMを用いて分析した結果、ケアを担うことで最も困難が多かった「ケア：葛藤期」のみをKJ法に準じ帰納的な分析を行った。

その結果、対象者が子どもでありながらケアを担うことによる困難として1)子どもはケアを担っていても、自分がケアを担っているという認識を持ちにくいこと、2)子どもがケアを担う場合にその困難を外部の人に伝えるのが難しいこと、3)同世代からの理解を得にくく、友人との付き合いに支障をきたす等の二次的な困難を抱える場合があること、4)親の病気を理解することが難しく相談先等がわからない等、情報不足に陥りやすいこと、5)家事や情緒的サポートを含むケアによる疲労等で学校生活に支障をきたす場合があることが示唆された。また、本研究の対象者は12歳より介護を担っており、総務省の調査で明らかとなった、介護を担う15歳から29歳の若者にも属さない。つまり、未だ可視化されていない子どもの存在を視野に入れる必要がある。

本研究から得られた結果が、ケアを担う子どもたちが、自分自身の人生を生きることができるよう、また周りの子どもたちと同じように遊び、学べるよう、今後支援のあり方を検討していくための一助となれば幸いである。